



日本語化したインドのことは

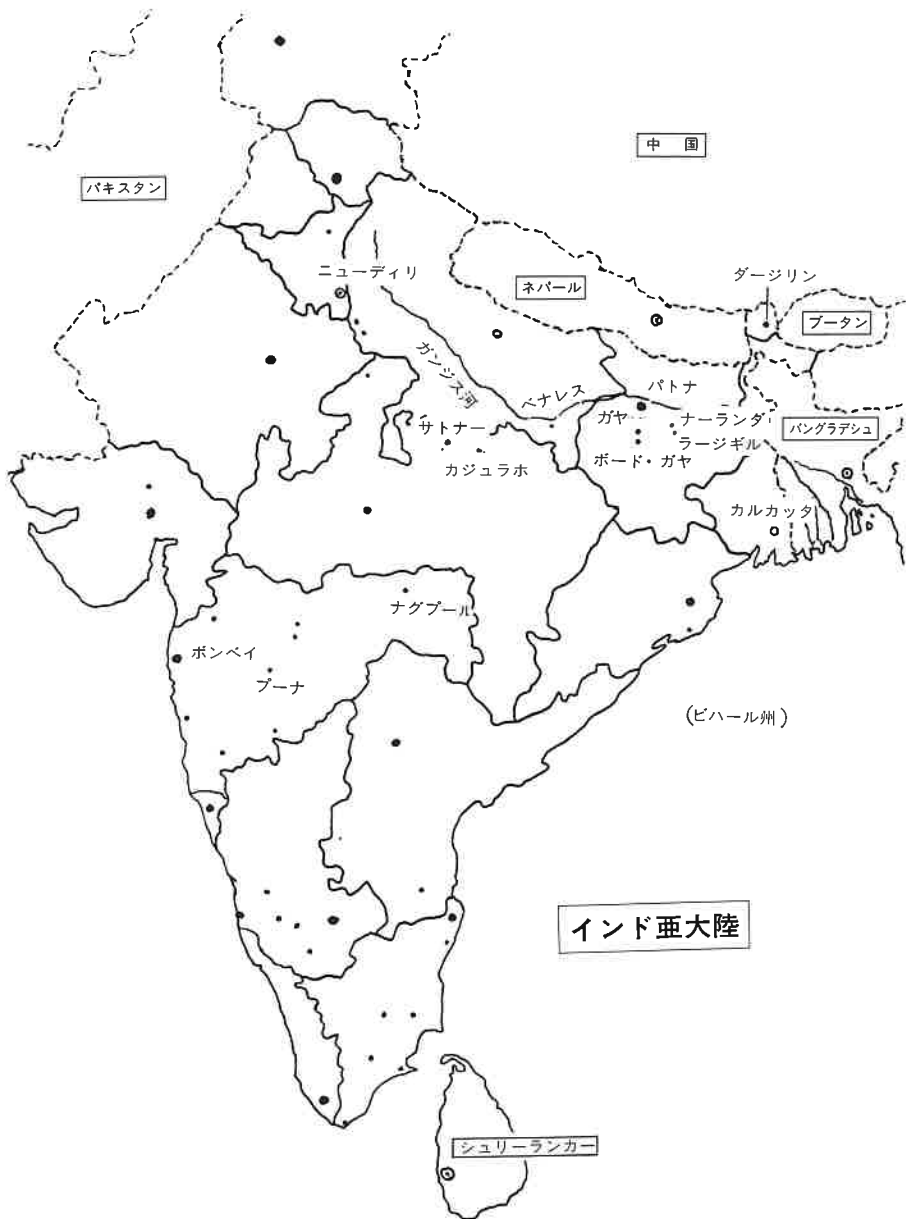
町田靖治

客年二月。インド亜大陸のヴィクラム暦では
キサーラヤといわれる「青々とした」とか「新
緑の」という意味の月のことである。このこと
ばは日本語では如月（きよつき）という音が当ててあり、現
地では春（ハラフ）の入口に当たる。

ニュー・デイルで、ナタラージャ（舞踏王）
と呼ばれる怒れるシヴァ神が踊り出している真
鍮像を買う交渉を終えて、同行者といっしょに

アサフ・アリ道路沿いのレストランに入った。

ここでの夕食は各種のカレー料理。黄色いハル
デイ（うこん）の具（か）はガラム・マサラ（辛い香
辛料）の香味と唐辛子でピリッと味つけしてあ
る。これには鶏の股肉が別の皿に盛ってあつた
が、BC六世紀ころに仏教やジャイナ教が興り
不殺生（じきせい）を説いて以来、ヒンドゥー教徒でも上位
のカーストの人達の食事は菜食になり、肉を食



べない。インド人がナンという平焼きパンにつけたり、米食に混ぜ合わせたりして食するタルカリと呼ばれるこの香ばしい惣菜は、英国人が後にカリという名称で世界に普及したものだ。

この店を出るときに小さな店名のはいつた銅板がビルの壁にはめ込まれているのが目に入った。それが「チョール・バーザール」。私はびっくりして、同行のガイドにいった。「おいおい、なんで店の名前にこんなのがつけてあるんだい？」と。チョール・バーザールというのは現地語で「泥棒市場」。盗んできたものか、安く仕入れたものかわからないが、とにかく、こまごまとしたありとあらゆる汚らしい雑貨を細かい路地沿いや露店で売っている市場のことだ。これをひとびとはこう呼んでいる。

このチョール（泥棒）ということばは、日本では外来語として意識されていないままに使われている。「ちよろい」とか「ちよろまかす」と

いった使われ方をして……である。多分、六世紀の仏教渡来時にインドの僧といっしょに日本に渡ってきたものであろうが……。

奈良の都に仏教といっしょにやってきたインド僧の目から見たら、日本の滝は驚き以外の何ものでもなかったことであろう。あの広大なガンジス平原にはゆつたりと流れるガンガ（英語名 ガンジス）とブツダが悟りを開こうとして苦行していた後、スジャータから乳靡にゅうひ（ダヒ）ヨーグルト）の施しを受けたことで知られているネーランジャラー河（清浄な川の意。現在の名称はパルグ河）など多くの支流があり、それを現地語ではナディ（川）と呼んでいる。このナディが一〇〇メートル以上も垂直に落ちているのを見て、「ナディだ、ナディだ。ナディが真下に向かつて落ちている」と仏教伝来時にインドからの外来僧達が叫んだのだろう。このありが

たいことばが「那智の滝」という名称になったと考えられる。

仏教聖地はガンジス河とその支流に沿ったビハール州にそのほとんどがある。ビハール州という名称はビハラー(寺院)から来ているように、仏教四大聖地や十大聖地の多くがある。ゴータマ・ブッダはこの地(現在はネパール領)に生まれ、何年もの苦行の後、瞑想によって悟りを開き、説教を始め布教して歩き、八〇歳を越えて亡くなっている。この入滅を涅槃ねはんというが、これはニルヴァーナの俗語ニツパーナの音写である。

そして、ブッダが亡くなって一〇〇年くらいすると、口授によって伝えられていたその教えがストトラ(経。音訳は修多羅)として編纂され、さらに没後五、六世紀もすると、己の悟りということだけでない他利主義的な考え方の大

乗マヤナ 仏教が興ってきた。

インドの憲法ではシヤカ暦を採用しているが、ヒンディー語圏ではヴィクラム暦が好んで使われている。この暦は太陽暦で西暦の四月中旬ころより始まり、一年が一二月ある。この第一月の時季はガルミー(暑中)という、モンsoon前の暑い暑い夏の季節になる。出家した仏教修行者達はこのヴァイシャークと呼ばれる月までにある程度の修行達成の目処をおいていたらしく、その後のモンスーン(雨季Ⅱヴァルシヤ)に入ると遍歴による説教を中断して雨安ウアン吾ゴ(雨季の定住)に入ってしまう。そこでヴァイシャークに入るとアチャリア(阿闍梨Ⅱ高僧)やグル(先輩僧)達は日ごろの世話(セワー)をやめて沙門(サマナ。出家僧)の修行度合をチェックする。そのときまでに悟りの域に達していない修行僧は、先学達からは「まだ、悟れていないのか。娑婆シヤバ(サハー)の人間と同じ

や、お前はヴァイシャーク・モハーだな」とか
らかわれたと伝えられている。

このモハーは無明とか愚妄、愚痴、痴という
漢訳（意訳）がされている。漢訳でも音訳の方
は「馬鹿^{マハ}」という文字が当てである。日本語で
これを読めば、むろん、バカとなる。バイシャ
ークは西暦の四月だから、一八世紀にインドを
占領した英国人は何とこのバイシャーク・モハ
ーにエプリル・フル（四月馬鹿）という訳語
を当てた。これが大英帝国の領土や国際共通語
としての英語が広がっていったのといつしよ
に、おもしろおかしく世界中に広がっていった。
私たちが何気なく使っている馬鹿とか四月馬
鹿という言葉は、このようにもともと仏教世界
で使われていたことばなのである。

五月の末ころインド洋の赤道付近に発生した
モンスーンがヒマラヤ山脈に吹き当たり、偏西

風によって流されてきて日本の梅雨^{つゆ}にもなる。

「雨期になったら、インドでは白っぽい茗荷の
花が咲いて、芽が出てくるのだろうな」と思い
起こす。そして、こんな伝説も。

ゴータマ・ブツダの弟子にチュツラパンタカ
（小道路の意味）という生まれつきもの覚えが
悪くて、自分の名前すら忘れてしまふ男がいた。
そこでブツダが杖につけた旗に名前を書き入れ
て持たせた。この男は終生これを持って歩き、
死んだ後はその墓に見知らぬシヨウガのような
草が生えてきた。つまり、ミヨウガの茎と芽が
出てきたのだ。このことからナムオサルノ（茗
荷〓名担い）と悼名をつけられ、それがもの忘
れに通じるようになったそう。

今は亡き名人落語家・古琴亭志ん生お得意の
『相模の茗荷宿』の話も、ネタは実にインドに
あったのだ。ブツダの前生物語りであるジャ
ータカ（本生話）にあったということがわかる。

ビハール州というのは二、五〇〇年も前にマ
ガダ国が栄え、ボードガヤやラージギル（旧名
ラージヤグリハ＝王舎城）、五〇ヘクトールもあ
るナーランダ仏教大学跡といった精神文化の豊
かさを示す遺跡が多いのに、現在は六割もの住
民が職にありつけないというインド最貧の州で
ある。首都パトナに下り立ち、市内に向かう車
内から見ても、農村部から職を求めて都市に出
てきた人、人、人といった住民達の貧しさと汚
さが目に入ってきた、それは都市の残酷さとい
うか、目を覆うばかりである。このような経済状
況のために労働運動が盛んである。街中の大き
なロータリーの中では、どこかの会社のストで
女性闘士がアジ演説をぶっている。

そのわきをラッパと太鼓の音に合わせて歌い
ながら、踊り歩いていく一行一〇人くらいに出
あった。冠婚葬祭で歌や音楽、踊りを供して村

村を巡回しながら日銭をかせいでいる、この太
鼓たたきはアンタツチャブル（原住民のこと）。

今はハリジャン＝神の子と呼ぶ）の仕事だ。こ
の喇叭は吠えたり叫ぶという意味のラヴァの音
写だし、インドの人達は太鼓の音はドウンドウ
ヴィという音でとらえている。

そういえば、阿弥陀如来根本陀羅尼という阿
弥陀仏（アマターバまたはアマターユスの音訳。
無量光または無量寿が意訳）の徳を讃える真言
の中に「アミリタ、ドウンドウヴィ、ソワレイ」
という経音が出てくる。「甘露の鼓声あるもの
よ」といって、阿弥陀如来をアムリタ（不死尊
＝甘露尊の意）として称えている。ドウンドウ
ヴィというこの音が日本語では「鼓」となっ
ているのだ。

弦楽器を爪弾く音はヴィーナとしてとらえ、
これには「琵琶」という音が当ててある。この
ヴィーナとは音楽の神様サラスヴァティ（弁財

正覚、等覚)。ブツダというのは悟ったという意味の過去受動分詞だが、釈尊はアルファトとかアルハン（阿羅漢）という聖者の称号を受けていた。いわば、如来ニケガクということだ。

菩提樹下の宝座のまわりでは「ナモー・タッサ・バガヴァト・アラハト・サンマーサン・ブツダッサ（私は阿羅漢であり、正等覚者である、かの世の世尊を礼拝します）」と白い袈裟カ（カーシャーヤ）姿のシュリー・ランカーからの巡礼ムの口誦が聞こえてくる。幸いにもこれがパリー語の三帰依文だとわかったので、私は後ろの方でつぶやくように口誦して帰依（ナモー。音訳は南無）の気持ちを表していた。

ゴータマ・ブツダがこの樹の下で阿頼耶あらや（アローヤ。人間意識の根本のこと）を悟った、このハート型の葉をつけた菩提樹の大木は現地語ではピーパル樹と呼ばれている。ここはブツダが瞑想を求めて入ったときの森の跡であろう。

この地では健陀けんた（ガンダー）といわれる赤黄色の袈裟けさを身にまとった、タイやビルマからの剃髪した巡礼グラムも目立つ。上座部仏教チラヴァムの人達の信仰心の厚さにはかなわない。また、チベット人は五体投地キンチャをして、敬虔な祈りを捧げている。この仏願の深さにはとてもかなわない。

ボードガヤには日本寺院もある。ここの内壁がすべて紅殻べんから（ベンガル地方産の赤色の顔料）で塗ってあるのを「どうしてなのだろう？」という気持ちでしばらく見ている内に、このことばがインドから来ていることをハッと思い出した。

私たちはこの寺にお参りをし、お賽銭を上げて、金色の大きなゴータマ・ブツダの坐像に祈りをささげてきた。銅銭でも寄進ダイナしたが、このダーナの音訳が壇那ダーナのだから、施しスラのできる人が幸せだということになる。そして、このお

金を現地語でパナという。これはpanaという音になる。平安時代のプファの音だ。これが後にhの音になってハナという発音に変わる。それは昔、比叡山の僧侶が京の色町で遊んだとき、金銭のことを隠語として「波那」と呼んだのが元らしい。これで芸人らにひいきの印に送る金銭、つまり「花代」ということが生まれていく。

この寺院は瓦で葺いてあったが、これは土器を表すカツパラの音写であろう。瓦の古語は葺いらかというが、これとてイッタカという現地の俗語から来ている。

私たちはボードガヤではアショーカ・ホテルという、仏教普及の功労者アショーカ大王の名前のついたホテルに泊まっていた。このホテルを取りまいている庭園の高い樹木がすばらしい。中でもアショーカ（無憂樹）のオレンジ色

の花がガルミー（暑中）の時季になると鮮やかに咲く。あの暑さの中ではまさに憂いのない感じになるわけだ。これはゴータマ・ブツダがルンビニーのその樹の下で生れ、クシナガラクシナガラのその樹の下で亡くなったというシャーラ（沙羅の木）、正覚の樹ビール（菩提樹）とともに仏教の三大聖樹である。

このホテル周辺の木々では雀のような鳥がかわいい声で鳴いていた。もしかしたらカラヴィンカか、あの迦陵頻伽かりようびんがか……。天女ウルヴァシーのように麗しき姿で、「梅檀せんたん（チャンダナ||白檀）は双葉より芳し」といったぐあいには……。

私はこの地で仏像が彫られているのと同じ黒い砂岩のベンチに座りながら、ぼんやりとこんなことを考えていた。私達はふだん意識していないが、アイウエオ……という五十音とて、もともと梵サンスクリット語の語順なのだ。この初めの音がア

で、終りの音がんだから、亜^あ咩^んの呼吸ということばは「いっさいの」という意味になる。このア・フーンの音写は私たちの言語の基準であるだけでなく、寺門の仁王様、狛犬や獅子の相となっていることを……。

ゴータマ・ブツダは人間の生き方を見つめて実践することを悟りの主眼とし、迷信的な火の儀式を嫌った。わが国の密教の儀式で用いる護^ご摩^まはもともとアフラ・マツダの神を崇めるゾロアスター教（拜火教）のハウマから来ているのだが、古代のバラモン教で火神アグニを祭る時に火炉で優曇^{うどんげ}華（ウドンバラ）の木などの香木を焚き、供物をこの中に投げ込んだホーマ（焚焼）となり、このことばから来ている。バラモン教、ヒンドゥー教へと受けつがれてきたこの土俗的な秘法の儀式は、仏教に入ると密教に受けつがれわが国へも入ってきた。

もつとも、昔、高野^{こうや}聖^{やひじり}が「万病に効くありがたい薬」などと称してこの灰を売りつけて金品を騙し取ったことから、盗つ人を護摩の灰というようになったのだが……。

痘^{あはた}痕^たということばとて、アルブダ（疱）の俗語アツブダの音写であらう。奈良時代に天然痘をあげたといっていたことだから、「仏教渡来時の俗語はずい分と残っているものだ……」との思いが巡ってくる。

私は「こんなにもインド文化が仏教の渡来といっしょに日本に入ってきているのだ、一二〇〇年も前から……。この仏教文化はどれほど人間性を豊かにしてくれたかわからない。帰国したらできるだけ早く名古屋へ行つて、日泰山覚王寺へお詣りに行つてこよう」と決めていた。この寺には、一八九八年にネパール国境のピプラーワで英国の駐在官ウイリアム・ペツペによ



太原晉祠

聖母殿

三臺庵

七牙



って発見された、ゴータマ・ブツダのシャリラ（舍利ノ遺骨）が納めてあるからだ。この後、訪れたカルカッタのインド博物館に飾られていたブツダの舍利器を見ながらも、この気持ちを強くしていた。

（一九九六年十月記）

〈追記〉

ボードガヤに入る三日前に、私達はシッキムの避暑地ダージリンにいた。バグドグラの空港に下り立ち、シリギリ茶の採れるシリギリの平坦地を通り、あの六一センチ幅の狭軌の登山鉄道沿いに六七キロメートル、標高差二〇〇〇メートルを低地の森林地帯（ジャンガル）を抜けて紅茶畑の中を小型バスで延々と登って行った。

かつてヒル・ステーションと呼ばれるダージリンの政庁が英国人によって置かれていた。展

望の丘」と、そこにあつて下のグームの地に移転させられたチベット仏教のサムテン・ロリン寺院を見ていて、ハタと気がついた。表記のとおり読めばドルジェという綴りをチベット語で発音したものが、ドチェという音になるし、ダージリンというのはドチェ・リンポチェ（高僧ドチェ）の英語風訛りの綴りではなからうか……と。

ここダージリンまでの七〇キロメートル近い延々とした鉄道やそれに沿った道路、ありとあらゆる斜面の紅茶園、製茶工場や街の建設工事などは英国人がネパール人労働者をつれてきて切り開いたために、この地はネパール人が六割を占めている。シッキム語を話すレプチャ人の二倍もいる。だから、土地の人の会話を聞いていると、ネパール語で話している人が多い。聞くとこの土地生まれのネパール人が多いのだそう。一九五三年、世界最高峰エヴェレスト（八、

八四八メートル)に初めて登ったテンジン・ノルゲとてこの土地生まれのシェルパ族(チベット系ネパール人)なので、ダージリン登山学校はここにあるし、その近くにテンジンの墓もある。

翌朝は暗いうちから古いランド・ローバーに乗って、タイガー・ヒル(約二、六〇〇メートル)へと登っていった。カンチェンジュンガ(八、五九八メートル)の展望台として有名なところだ。ここでは日の出と月の入りが同時に見られた。私は静岡市郊外の吐月峯柴月寺に三喜庵画伯の書が額入りで残されていたことを思い出していた。画伯が転院したことを耳にしながらも日本を発ってきたので、「これは画伯に墨絵で描いてもらいたい景色だ。早く退院してきてもらいたいなあ」と思いながら、しばらく月の入りをじいっと眺めていた。

それから気持ち切りかえて、同行したガイドの名前がラヴィ(月)なので、「おいおい、月が消えていってしまわず」とからかっていた。これはインド人がひとを誉めるのに「月の光のような安らぎ」とか、「月輪のような」ということを掛けていっていたのだ。月はふつうチャンドラというが、これは英語のキャンドル(ろうそく)とかカンデラ(光度)の語源だし、日本語のカンテラの語源でもある。月や光明を神格化した月天のことでもあるし……。

カンチェンジュンガというのは英語風の綴りであって、正しくはカンチェンゾオンガだ。つまり、チベット語でいう「偉大な雪の五つの宝庫」。これを仏教語的にいうと五大宝蔵パンチヤタルセツポということになるのだから、チベット人にとつての聖山なのである。チベット人やシェルパ族がこの山をみたたん、思わず「オン・マニ・ペメ・フム(蓮花の中に宝珠あれ)」という呪文を唱え

たくなる山なのだ。

私はこの展望台で右側の尾根を見ていながら、シッキムの首都ガントの方向を目で追っていた。かつて(一九〇二年)、外国人初の入蔵者、河川慧海師がチベットを脱出してきたニヤンラ(ニヤ峠)の方が見えるか……と。そこには今は自動車道路が通じているので、「このルートから入蔵できるのだろうか?」とも。

カンチェンゾンガを見ているうちに、インド人はこのヒマラヤの山山より遙か八万ヨージヨナ(六〇万キロメートル)上空の天上界をシユメールと考えていたことも思い返していた。ヒンドゥー教の宇宙観が仏教に取り入れられているのだ。そして、このシユメールは音訳が須弥山^{みせん}だが意識は妙高山であり、そこに住む神がインドラ(意識は帝釈天。音訳は印陀羅)だということ……。カンチェンゾンガがヒマラヤ連峯の東端の山なので、東方で仏法を守るイ

ンドラ神の伝説とも合っているし……。

町田 靖治(まちだ やすはる)

一九三八年(昭和一三年)生まれ。慶応大
学卒。(株)町田園本店店主、ヒマラヤ観光開
発(株)取締役。一九八三年、日本人として初
めてアンナプルナ山塊周囲のMTBトレッ
キングに成功。『ネパール(T・ハーゲン著、
白水社)』などの訳書あり。インド亜大陸の
文化についての資料の翻訳がライフワーク。